

# 外国籍介護従事者の介護記録における誤用分析

豊田 宗裕<sup>\*1</sup> 中村 道子<sup>\*2</sup> 中村 直人<sup>\*3</sup> 松井 志麻<sup>\*4</sup> 寺沢 清子<sup>\*5</sup>

## Error Analysis in the Care Records maintained by Foreign Nursing Care Worker

TOYODA, Munehiro, NAKAMURA, Michiko, NAKAMURA, Naoto,  
MATSUI, Shima and TERASAWA, Sumiko

### 要旨

本研究は、介護記録の作成が難しい定住外国人を対象に、介護記録の誤用傾向を分析することで運用上の課題を明らかにし、効率的な OJT の方法を模索することを目的とした。3 名の評価者は介護記録を読んで理解可能文と理解不可能文に分類し、日本語教師はその介護記録に含まれる日本語的な誤りを分類した。その結果、表記・語彙的な誤りは理解可能文において、文法・分類不能な誤用は理解不可能文において有意に多いことが示された。誤用の質的分析では、評価者が意味不明と評価した単語や文章には、日本語教師が分類不能とした単語が多く含まれていた。このことから、記録者の文意を理解できる介護記録であるか否かは、誤りの個数ではなく、誤りの質の方が内容理解に大きな影響を及ぼすため、効果的な OJT を実施するためには、理解不可能文にみられるような文法的な誤用や分類不能とされる表現を優先的に指導することの必要性が推察された。

### キーワード

介護記録, 外国籍介護従事者, 誤用分析, 定住外国人, オン・ザ・ジョブ・トレーニング

### Abstract

It is difficult for foreign-born nursing care professionals to create error-free records in Japanese. This study aimed to identify operational issues pertaining to mistakes that tend to be made by non-Japanese resident nursing care workers in maintaining the required documentation. The investigation further endeavored to explore methods for effective on-the-job training for such nursing care worker. Three evaluators read nursing records and categorized them into comprehensible and incomprehensible sentences. Trained instructor of Japanese also categorized language errors present in those records. Results revealed that notational and lexical errors were significantly common in comprehensible sentences. Grammatical and unclassifiable mistakes were found to be extensively frequent in incomprehensible sentences. A qualitative analysis of errors yielded many words and sentences that were assessed by the evaluators to be incomprehensible. Similarly, numerous mistakes were ascertained to be unclassifiable by Japanese language teacher. On the basis of these findings, it may be inferred that the category of errors is more important than the frequency in determining the intended meaning of the non-native documenters. Additionally, implementing effective on-the-job-training would require prioritized instruction on grammatical errors that were found to be common and expressions that defied classification and were deemed incomprehensible.

### Key words

Care Record, foreign nursing care worker, Error Analysis, foreign residents, On the Job Training

## 本研究の位置づけと目的

筆者らは平成21年度（2009）より、神奈川県及び横浜市との共同事業（「経済連携協定/EPAにおける介護福祉士候補者の受け入れ施設巡回・訪問研修事業」）として、神奈川県内で就労するEPA介護福祉士候補者（以下候補者とする）に対して、

日本での就労に向けた日本語学習会及び介護福祉業務への支援と、国家試験合格に向けた受験対策のための学習支援事業を実施してきた。当時の学習支援事業を進める過程で、候補者からは滞在期間の長期化に伴い、担当する業務の内容が多岐にわたること及びその内容が実践的になることから、他職員や利用者との簡単な会話はできるものの、それを記録として残すことの

\* 1 : 聖徳大学心理・福祉学部社会福祉学科・教授／\* 2 : 東京YWCAヒューマンサービスサポートセンター・講師／  
\* 3 : 駒澤大学文学部心理学科・非常勤講師／\* 4 : 国際学園・非常勤講師／\* 5 : 元横浜国際福祉専門学校・講師

困難さについては、先行研究においても多くの指摘がなされていた。例えば伊藤<sup>1)</sup>は、候補者が最も習得に時間を要したのは介護記録（17ヶ月）であり、それ以外の介護業務に関してはいずれも一年以内に習得できていることを明らかにしている。このことは候補者を受け入れている各施設の担当者（介護長など実際の介護従事者）などからもよく聞かれたことである。また、候補者の就労状況に関する諸研究においても、候補者の多くは就労後1年程度で利用者や職員とのコミュニケーションには問題がなくなるが介護記録の作成は難しく、17ヶ月から24ヶ月以上の歳月を要するといわれており、会話能力と識字能力の乖離が指摘されている<sup>1) 2) 3) 4)</sup>。このことは、記録を重視するわが国の介護現場において、日本語以外を母国語とする外国籍介護従事者を受け入れる際に、介護現場では大きな課題として取り上げられていたと考えられる<sup>5)</sup>。また、候補者だけでなく定住外国人においても、日常会話に不自由はないが日本語の読み書きの能力が不十分である場合、文書による記録や報告の大半を日本人職員が負担している状況にある<sup>6)</sup>。そのため、外国籍介護従事者に対しては、介護記録の作成よりも利用者とのコミュニケーションに業務の重きを置いたり<sup>7)</sup>、チェックリスト形式の記録様式を用いたりしている施設もある<sup>8)</sup>。施設側がこのような消極的な解決策を採用している背景には、介護現場における慢性的な人手不足に伴って、通常業務の遂行と外国籍介護従事者の業務に関する指導で、教育担当者の負担がすでに増加しており、十分な介護記録の指導が難しい点が挙げられる<sup>3) 8) 9)</sup>。こうした状況については、筆者らも同様のことを課題として指摘しており<sup>10)</sup>、今後外国籍介護従事者の受け入れをスムーズに進めていくためにも、早急に解決しなければならない課題として考えていた。

その過程で、筆者らは介護現場で受け入れが進む日本語以外を母国語とする外国籍介護従事者が、効果的・効率的な就労を行うために課題とされている「介護記録のあり方」について、有益な介護記録モデルの構築を目的とした「外国籍介護労働者に有効な介護記録モデルに関する研究」を実施した<sup>11)</sup>。この研究では、①必要な介護記録の要素・内容の検討、②必要かつ十分な介護記録モデルの枠組みの検討、③使いやすい介護記録フォームの作成（基本事項の明確化）とその実践課程での試行の3つを目標とし、研究に取り組んだ。研究を進める過程において、特に③の使いやすい介護記録フォームの作成を検討するにあたり、介護従事者にとって「実践における必要かつ十分な介護記録フォーム」を作成するのは極めて困難であり、再度「求められる介護記録とは何か」という観点に立ち返り、調査の方法やその内容を再検討した経過があった。

その中で、介護記録のフォームを変更することで介護記録の量や質が向上するのか、また業務中における記録作成過程での効果的・効率的な指導（オン・ザ・ジョブ・トレーニング：

OJT）を導入した場合、さらなる向上が望めるかについて、実際の外国籍介護従事者が就労する介護施設の協力の下、施設内での介護記録の変化の量と質を図るという調査を実施することとした。このことは先に述べた「会話面で業務に支障はないが介護記録の作成が難しい外国籍介護従事者」にとって、記録フォームよりも、他の介護スタッフがその要旨を理解でき、チームとして一緒に仕事をするには「伝わる介護記録」の作成が重要であり、そのためには書き手だけではなく読み手の文章理解の妨げになっているエラーの要素を明らかにし、それを記録作成の重要な要素として調査の中に位置づけたことにある。

本稿では、先の研究成果（引用文献11）の一部を取り上げ、会話面で業務に支障はないが介護記録の作成が難しい定住外国人を対象に、介護記録のエラー分析を量的・質的の両側面から行い、日本語の運用上の課題及びその妨げとなっている要素を明らかにすることを目的として、具体的な分析を行った成果をまとめた。

## 方 法

### 1. 記録者及び分析対象記録

S特別養護老人ホームに勤務するコロンビア人のA非常勤職員（調査時38歳、女性）。在留期間は15年7ヶ月であり、在職期間は6ヶ月である。日本語能力試験の等級は有していないが、利用者や職員とのコミュニケーションは問題なくとれており、現在の業務に支障はない状況であった。2016年8月からパソコンのキーボード入力によってチェックリスト形式の介護記録（株式会社東経システムの福祉見聞録を使用）を記入していたが、文章での記入経験はなかった。2016年9月3日から9月16日の2週間のうち、記録者Aが勤務した7日間の介護記録の自由記述欄に記載された文章を分析の対象とした。句点から句点までを1文と定義したところ、33文が抽出された。介護記録の対象者である利用者Hは、要介護3、障害老人の日常生活自立度A2の者であった。

### 2. 記録評価者及び評価方法

実験者効果等の剰余変数の交絡を防ぐため、記録者Aを直接知らない3名の介護経験者が記録の評価を行った。評価者の背景職種や勤務経験などに偏りがないよう配慮した。評価者X（柔道整復師）は通所介護事業所で6年間、評価者Y（無資格）は特別養護老人ホームで半年間、評価者Z（介護福祉士）は通所介護事業所で6年間の勤務歴のある者であった。

3名の評価者はそれぞれ、記録者Aの記録を1文毎に「日本語的な誤用が含まれていても理解はできる文章（以下、理解可能文と呼ぶ）」と「理解できない文章（以下、理解不可能文と呼ぶ）」の2つに分類し、後者については、理解できない点を評価用紙に記載した。3名の評価が分かれた場合は、多かった

方の評価を最終的な評価とした。例えば、1名が理解可能文、2名が理解不可能文と評価した場合、その文章は理解不可能文として扱った。評価に要した時間は、約30分であった。

3. 日本語評価者及び評価方法

経済連携協定で来日した介護福祉士候補者に対して日本語教育を行う日本語教師（日本語教師歴7年）が介護記録に含まれる誤用の評価を行った。

日本語評価者は、表1の日本語評価基準に則って、1文毎に誤用の分析を行った。促音、拗音などの音声表記の誤り、自分に聞こえた音のまま文字表記をしていると思われる誤り（例えば、冷たいを「すめたい」と記入）、単純な変換ミス、句点の脱落、話し言葉をそのまま記載している誤り（縮約形）、語彙選択の誤りを表記・語彙的な誤りとした（詳細は表1(1)–(10)を参照）。一方、会話文の括弧が未記載で引用部分が不明瞭である点、助詞・動詞・形容詞の誤り、語順の誤り、複文の誤りを文法的誤りとした（詳細は表1(11)–(16)参照）。また、日本語評価者が記録者の書きたいことを推測しがたく、上記のいずれにも分類することが難しいものは「分類不能」として文法的な誤りに分類した。また、漢字で表記すべき単語をひらがなで表記している場合は、誤りとはカウントしなかった。

4. 倫理的配慮

本調査は、被調査者及び施設長に対して本研究の目的を伝え

た上で、「S特別養護老人ホーム倫理綱領（2000年4月制定）」並びに「個人情報保護に関する基本方針（2005年4月制定）」に則り、調査を実施することについて文書にて同意を得た。また本研究は、著者すべてが所属する倫理審査委員会（調査は第一著者所属の機関における調査研究委員会の名の下に実施されており、著者は全てこの委員会に属して調査研究を進めてきた。また調査に関連する倫理項目についてはすべて調査研究委員会の属する学校の倫理審査委員会のもと、実施がされている）で承認を得た後に実施されている。（承認番号：2016-001）。

5. 手続き

第5著者は3名の評価者に対して評価方法を伝え、記録者Aが作成した記録の評価用紙を渡した。評価終了後、その評価用紙を回収し、理解可能文と理解不可能文に分類した。また、日本語評価者は、表1の日本語評価基準に基づき当該記録に含まれる日本語の誤用を分類した。誤用数の統計的な分析には、PASW Statistic18を使用した。

結 果

分析対象の33文のうち、日本語の誤りが含まれない文章が1文、日本語の誤りを含む文章が32文あった。日本語の誤りを含む文章のうち、理解可能文は17文（平均文字数43.1文字）、理

表1 日本語評価基準

定義		記録の誤用例	理解可能文 誤用数 (%)		理解不可能文 誤用数 (%)	
1 促音	「っ」の脱落。	(誤) ずと→(正) ずっと	7	8.4	5	6.2
2 拗音	「ゃ」「ゅ」「ょ」の脱落や、他の文字での代用。	(誤) ばしお→(正) ばしよ (誤) そくどう→(正) しょくどう	0	0.0	4	4.9
3 長音	「ー」（伸ばす音）の脱落。	(誤) テブル→(正) テーブル (誤) けっこ→(正) けっこう	11	13.3	2	2.5
4 濁音と清音	濁音にすべきところを清音で表記、または清音にすべきところを濁音で表記。	(誤) スボン→(正) スポン (誤) ドイレ→(正) トイレ	3	3.6	1	1.2
5 その他の音	促音・拗音・長音・濁音と清音・半濁音以外の表記の誤りや脱落。四つがな（じ・ち、ず・つ）の混同も含む。	(誤) すめたい→(正) つめたい (誤) かたづけ→(正) かたづける	7	8.4	7	8.6
6 かなとカナ	ひらがなにすべきところをカタカナで表記、またはカタカナにすべきところをひらがなで表記。	(誤) どあ→(正) ドア (誤) そのママ→(正) そのまま	12	14.5	1	1.2
7 入力・変換ミス <sup>a</sup>	パソコン使用の際の入力ミス、または変換ミス。	(誤) Tさん→(正) Tさん (誤) ドアの前置立って→(正) ドアの前に立って	4	4.8	7	8.6
8 句点 <sup>b</sup>	「。」の脱落。	(誤) おやつを食べました そのあとで… →(正) おやつを食べました。そのあとで…	6	7.2	1	1.2
9 縮約形	通常は話し言葉で用いる「縮約形」を書き言葉で用いている。	(誤) 立って→(正) 立っている (誤) 置いとく→(正) 置いておく	5	6.0	4	4.9
10 語彙選択	語彙の選択の誤り。	(誤) 忘れちゃった→(正) 忘れてしまった (誤) 近いにいる→(正) 近くにいる (誤) 窓口に座っている→(正) 窓際に座っている	3	3.6	3	3.7
11 引用なし	かぎ括弧を使っていない、「～と言った。」が抜けているなどの理由で、発話部分がどこからどこまでか不明確なもの。	(誤) どうぞすわってください。でもTさんは… →(正) 「どうぞすわってください」と声をかけた。でもTさんは…	8	9.6	7	8.6
12 助詞 <sup>c</sup>	助詞の誤り、または助詞の脱落。	(誤) 便を出なかった→(正) 便が出なかった (誤) 田中さん 聞いた。→(正) 田中さんに／が聞いた。	2	2.4	7	8.6
13 動詞	動詞の形の誤りや、自動詞・他動詞の誤りなど。	(誤) トイレに行くです→(正) トイレに行きます (誤) フロアをまわして→(正) フロアをまわって	7	8.4	8	9.9
14 形容詞	形容詞の形の誤り。	(誤) おとなし すわっている→(正) おとなしくすわっている	1	1.2	0	0.0
15 語順	語順の誤り。	(誤) Tさんは聞いた。「どうしたの、彼は」 →(正) Tさんは「どうしたの、彼は」と聞いた。	1	1.2	3	3.7
16 複文 <sup>d</sup>	「～（し）て、…」 「～（する）と、…」 「～（ので、…）」 「～たら、…」 などで単文をつなぐべきところを、他の表現で代用したり、適切な表現が抜けたりしている。	(誤) みんなの職員→(正) 職員 みんな (誤) 手をつないでいる と 歩いている →(正) 手をつないで歩いている	5	6.0	7	8.6
17 分類不能	記録者の書きたいこと、意図が推測しがたく、上記のいずれの誤用にも分類できないもの。	(誤) お茶をあげました と 全部飲んでいました。 →(正) お茶をあげたら、全部飲んでいました。	1	1.2	14	17.3

a：記録者の音・表記の認識の誤りなのか、単なる不注意による誤りなのかの区分は、日本語評価者の判断によるものである。例えば、「ばしお（場所）」の場合、「ばしお」という音・表記と認識しているのか、「BA SHO」と入力するつもりが不注意で「BA SIO」と入力したのか、等。

b：本来は句点にすべきところを読点にしている、また、読点を打つべきところをスペースにしているという誤りは除外し、脱落のみを誤用とした。

c：介護記録においては、「～の訴えあり」など、助詞が欠落した記録も多く用いられていることから、助詞の脱落については、動作主（だれが・だれに）や場所の理解に著しく混乱を招くもののみを誤用とした。

d：接続詞の表現の誤りも含めた。

解不可能文は15文（平均文字数57.1文字）であった。

### 1. 理解可能文と理解不可能文の誤用数の比較

理解可能文の総誤用数は83箇所、そのうち表記・語彙的な誤用は58箇所（69.9%）、文法的な誤りは24箇所（28.9%）、分類不能は1箇所（1.2%）であった。一方、理解不可能文の総誤用は81箇所、表記・語彙的な誤用数は35箇所（43.2%）、文法的な誤りは32箇所（30.9%）、分類不能は14箇所（17.3%）であった。

評価項目ごとの誤用数は表1の通りである。理解可能文の誤用傾向を見てみると、「かなとカナ（14.5%）」が最も多く、次いで「長音（13.3%）」、「促音とその他の音（10.4%）」と表記的な誤りが多く、文法的な誤用は「引用なし（9.6%）」、「動詞（8.7%）」、「複文（6.0%）」の順で多かった。一方、理解不可能文の誤用の傾向を見てみると、「分類不能（17.2%）」が最も多く、続いて「動詞（9.9%）」、「引用なし、助詞、複文、その他の音、入力・変換ミス（8.6%）」であった。

理解可能文及び理解不可能文の表記・語彙的な誤りと文法・理解不可能な誤用数についてカイ二乗検定を実施したところ、1%水準で有意な差が認められた（ $\chi^2(1) = 11.9, p = <.01$ ）。残差分析の結果から、表記・語彙的な誤りは理解可能文において有意に多く、文法・分類不能な誤用は理解不可能文において有意に多いということが明らかになった。

### 2. 評価者のコメントと日本語教師の分類の対応について

3名の評価者が「理解が難しい」と答えた42箇所を質的に分類すると、「言葉・記録の一部・時間が分からない」という回答が19箇所と最も多く、続いて「全体的な意味が分からない・何が言いたいのか分からない」という回答が16箇所、「誰が誰に何をしたいのか分からない（動作主不明）」が5箇所、「どのように行動したのかが分からない」が2箇所であった。このうち、1名の評価者のみが「理解が難しい」と答えたことで理解可能文に分類された文章に含まれた誤用は動作主不明が3箇所（例：それ を かたすけるです（日本語教師は「その他の音」に分類））、言葉が分からないが4箇所（例：みんなの しょくいんさん（語順）／ママ 立てるほしみたいです（かなとカナ・動詞））の計7箇所であった。

評価者が「分からない単語」として挙げたものには「かれは や、や（分類不能）」、「だいいぶ けど（その他の音）」、「すうあてる（分類不能）」、「はやしよく（分類不能）」等が挙げられる。また、先ほどの用語が含まれる文章を「全体的に意味が分からない」と評価した者もいた。

### 3. 理解可能文と理解不可能文に含まれる誤用の質的な検討

理解可能文および理解不可能文の例を2文ずつ表2に示した。理解可能文の2例においては、動詞や複文などの誤りがみられるものの、誤用の多くは表記的な誤りであったのに対し、理解不可能文には「フロアにまえて」「やる する」など内容理解が難しい語句が含まれていた。

## 考 察

### 1. 日本語の誤用と介護記録の活用

分析対象である33文のうち、日本語的に誤りのない文章は1文しかなかったが、残りの32文のうち17文（51.5%）については表記や文法的な誤りが含まれているものの、記録を読んだ者がその内容を理解できると答えていた。このことから、これらの文章は最低限ではあるが「職員間の情報共有」という介護記録の目的<sup>12)</sup>の1つは果たしている文章であるといえよう。これらの文章の特徴は、本来カタカナで表記すべき単語をひらがなで表記している点や単純な入力ミス、音声表記の誤り等の表記・語彙的な誤用が約7割を占めており、文法的な誤りは3割程度であった。したがって、表記・語彙的な誤用の多くは介護記録の全体的な意味理解を妨げないことが明らかになった。ま

表2 理解可能文と理解不可能文に含まれる誤用例

理解可能文	誤用の分類
かうた <sup>1</sup> から コップ とるする <sup>2</sup> 1 の で 私 H <sup>3</sup> <u>さ<sup>4</sup></u> 飲み物 が <u>ほ<sup>5</sup></u> しですが <sup>4</sup> 、 <sup>5</sup>	1: (正) カウンター（かなとカナ、長音） 2: (正) 取ろうとする（動詞） 3: (正) さん（入力ミス） 4: (正) 欲しいですか（長音） 5: 「 」なし（引用なし）
じぶん の おやつ <u>たべました<sup>1</sup></u> その あと で W <u>しょくいん</u> <u>さん</u> I <u>さ<sup>2</sup></u> ん の おやつのじゅんび <u>てぶる<sup>2</sup></u> を 2 出した、W <sup>3</sup> <u>さん</u> I <u>さん</u> <u>よう</u> <u>と<sup>4</sup></u> <u>き<sup>4</sup></u> に H <u>さん</u> <u>そてぶる<sup>5</sup></u> に <u>すばて<sup>6</sup></u> と おやつ とります <sup>7</sup> 。	1: 食べました。（句点） 2: テーブル（かなとカナ、長音） 3: 個人名（入力・変換ミス） 4: (分類不能) 5: テーブル（かなとカナ、長音） 6: 座って（その他の音） 7: 座って、おやつをとります（複文）
理解不可能文	誤用の分類
朝食 <u>おわてる<sup>1</sup></u> あと で すこし あ 1 るいて 2かい 3かい ぐらい フロ ア に <u>まえて<sup>2</sup></u> 、 と どこ でもその	1: 終わった（動詞） 2: (分類不能)
<u>たねべる<sup>1</sup></u> ときに <u>だいいぶ<sup>2</sup></u> 、けど 義歯 <u>こえ</u> <u>かける<sup>3</sup></u> けど <u>ひより</u> <u>い</u> 2 <u>くで<sup>4</sup></u> へや <u>わかつて<sup>5</sup></u> けど なに やろ <u>する<sup>6</sup></u> わすれてる みたいです、 その <u>かわるで<sup>7</sup></u> <u>トイレ</u> に <u>さがしま<sup>8</sup></u> <u>す<sup>8</sup></u> 。	1: 食べる（入力・変換ミス） 2: 大丈夫（その他の音） 3: (分類不能) 4: (分類不能) 5: 分かっている（促音） 6: (分類不能) 7: (分類不能) 8: トイレを探します（助詞） <sup>a</sup>

a: 実際の記録には利用者の氏名が記載されていたが、筆者がイニシャルに変更した。

b: 助詞の誤りであるため、誤用に含めた。

た、理解可能文の例2に挙げたように「よう とき」という分類不能な誤用がみられるが、この誤用は文の主要な部分における誤りではなく、「Hさんは自分のおやつを食べたにも関わらず、W職員がIさんのおやつをテーブルに準備して、W職員がIさん呼びに行った時に、Hさんがそのテーブルに座っておやつを盗ってしまった」という文意は伝わるため、評価者は「理解可能」と評価したものと推察される。

一方で、評価者が理解不可能とした15文のうち、10文には日本語教師ですら誤りを分類することができない誤用が含まれており、3名の評価者もそれらの箇所を「理解ができない」と評価していた。このことから、記録者の文意を理解できる介護記録であるか否かは、誤りの個数ではなく、どの種類の誤りが文のどの箇所にあるかが問題であり、文の中で情報の重要度が高い部分に分類不能のような致命的な誤りが含まれてしまうと、たとえ誤用数が少なかったとしても介護記録の意味理解を困難

にし、介護記録としての機能を果たすことが難しくなると言えよう。

## 2. OJTの必要性

経済連携協定で来日した介護福祉士候補者が介護記録を作成する際に、①他者に伝わる文の書き方、②敬語を用いた利用者の記述、③特変時の記録作成、④書き言葉での記録作成、⑤専門用語と漢字の使用の5つについて難しさを感じていることが報告されており<sup>13)</sup>、①から自分が書いた介護記録の内容が他の職員に伝わっていないという懸念を外国籍介護従事者自身も抱いていることが読み取れる。したがって、OJT(On the job training)においては、日本語の誤りのない完璧な文章を目指すのではなく、理解不可能文にみられるような文法的な誤用や分類不能とされる表現がどのような場面の記録にみられるかを分析し、それらの表現を優先的に指導することで、効率よく情報共有に耐える介護記録を作成することができるのではないかと考える。具体的なOJTの実施にあたっては、例えばユニット単位で指導する日本人スタッフの側が誤用や分類不能が発生しやすい場面を共有し、そうした場面には同伴をしながら、適時適切な表現をその場で指導していくことが必要である。

## 3. 今後の課題

介護記録の内容は、必然的にケアプランの内容と正しく連動されていないと見なければならず<sup>14)</sup>、ケアプランの目標に対する取り組みや配慮点に留意しながら、利用者の言動や、職員の行った支援内容や気づき、利用者や家族の要望などを専門職の視点で書くことが求められている<sup>12) 15) 16) 17)</sup>。本稿では、介護記録に含まれる誤用内容についてのみ分析対象としたが、今後はどのような環境を整えれば外国籍介護従事者がケアプランに即した介護記録の作成ができるかをハード・ソフトの両面から検討することが必要であると考えられる。例えばハード面でいえば、ITCを活用した入力機器を導入し、介護記録を標準化することで誤用の頻度を減少させることが可能であると思われる。ただそれでは、個々の利用者のケアプランに合わせた記録の作成が不十分だと考えられるため、外国籍介護従事者の力量アップという意味から、ソフト面（人材育成）について、前述したようなOJTの方法を用いた介護記録作成の指導場面を設定することが必要である。

また、今回は介護記録における「書き」に焦点を当てたが、介護記録の情報共有という目的に鑑みれば、他職員が書いた介護記録を読んだ外国籍介護従事者が読みやすい表現、読みにくい表現などを抽出し、それらの文章に含まれる日本語の特徴を検討することで介護記録の誤読による事故やヒヤリハットの減少が見込まれる。今回の研究では、対象者は定住外国人1名であったため、経済連携協定で来日した介護福祉士候補者や日本語能力試験に向けての学習経験がある者への応用可能性は定かではない。今後は対象者を増やし、外国籍介護従事者が現場で

直面する介護記録の課題について、「読み」「書き」「話す」「聞く」の4技能を総合的に検討していく必要がある。

## 謝辞

ご協力いただきましたS特別養護老人ホームの施設長以下職員、利用者の皆様には、深く感謝申し上げます。

## 付記

本研究は、第46回（2015年度）三菱財団社会福祉事業・研究助成を受けた研究成果の一部である。

## 引用文献

- 1) 伊藤鏡. 外国人介護福祉士候補者の実務研修後の技術評価と就労意向—インドネシア第一陣への調査から—, 福祉社会開発研究, 2015, vol.10, p.1-12.
- 2) 石岡晃. 外国人介護福祉士・看護師候補者の受入ネットワーク—ふじのくにEPAネットワークの取り組み, 月間福祉, 2011, vol.94, no.12, p.20-23.
- 3) 小川玲子・平野裕子・川口貞親・大野俊. 来日第1陣のインドネシア人看護師・介護福祉士候補者を受け入れた全国の病院・介護施設に対する追跡調査（第1報）—受け入れの現状と課題を中心に—, 九州大学アジア総合政策センター紀要, 2010, vol.5, p.85-98.
- 4) 塚田典子. 日本で初めてEPAによる外国人介護福祉士候補者を受け入れた施設現場の実態と将来展望, 支援, 2014, vol.4, p.87-104.
- 5) 立川和美. EPAをめぐる国内での日本語教育の現状—インドネシア人看護師・介護福祉士候補者への教育と国家試験に向けた方策—, 社会学部論叢, 2011, vol.22, no.1, p.101-111.
- 6) 北村育子. 介護・看護を提供する組織の多様化への対応—EPAによる外国人の受入経験をふまえて—, 日本福祉大学研究紀要, 2011, vol.122, p.45-59.
- 7) 安里和晃. 外国人介護労働者は何が特別か, 老年社会科学, 2009, vol.31, no.3, p.390-396.
- 8) 角田隆. EPA介護福祉士候補者受け入れ開始から8年定着し、評価も高い外国人介護福祉士, 介護保険情報, 2015, vol.16, no.8, p.30-33.
- 9) 上林千恵子. 介護人材の不足と外国人労働者受け入れ—EPAによる介護士候補者受け入れの事例から—, 日本労働研究雑誌, 2015, vol.57, no.9, p.88-97.
- 10) 豊田宗裕（国際学園・研究代表者）. 外国人による介護福祉業務の定着に向けた効果的研修プログラムの開発に関する調査, 平成25年度厚生労働省セーフティネット支援対策等補助事業報告書, 2013, p.60-66.
- 11) 豊田宗裕、中村道子ほか. 外国籍介護労働者に有効な介護記録モデルに関する研究, 第46回（平成27年度）, 三菱財団社会福祉事業研究助成報告書, 2017.
- 12) 梅沢佳裕. 施設職員のための介護記録の書き方, 介護福祉, 2011, vol.83, p.77-90.
- 13) 中村道子・金美辰・豊田宗裕. 経済連携協定（EPA）に基づく外国籍介護福祉士候補者が抱く介護記録の課題, 対人援助学研究, 2017, vol.6, p.1-9.
- 14) 蜂谷千鶴・古谷幸子. 特別養護老人ホームにおける介護記録の現状と課題—ケース記録の内容分析として—, いわき短期大学研究紀要, 2008, vol.41, p.41-49.
- 15) 是枝祥子. 介護職員のための根拠に基づいた記録の書き方, 介護福祉, 2011, vol.83, p.47-60.
- 16) 田形隆尚. 認知症ケアにおける介護記録 第3回記録の効率化の実践, 認知症ケア最前線, 2014, vol.46, p.62-64.
- 17) 高橋好美・是枝祥子. 対談 伝わる、伝える介護記録とは, ふれあいケア, 2011, vol.17, no.6, p.12-19.